

初現期横穴式石室から見た畿内と東国

右 島 和 夫

## 目次

I . はじめに .....	17
II . 畿内地域の初現期横穴式石室前方後円墳の諸例 .....	18
III . 上毛野地域の初現期横穴式石室前方後円墳の諸例 .....	21
IV . おわりに .....	25

## 論文要旨

畿内地域における横穴式石室の採用は、大勢としては5世紀後半以降のことである。その場合、大王墓等の最有力前方後円墳における採用は若干後出する可能性がある。現在までのところ確実な事例として奈良県高取町市尾墓山古墳があり、6世紀初頭を前後する時期の成立である。これに近い時期の所産として天理市東乗鞍古墳がある。また石室自体の具体像は不明であるが、高槻市今城塚古墳が6世紀前半の所産として注意される。

最有力墳に横穴式石室が採用されるには、前方後円墳の墳丘といかに構造的に整合性をはかるかの課題があり、石室の祖型が百済から5世紀後半に伝えられて以降、採用上のタイムラグにつながったと考えられる。

東日本における横穴式石室の採用は、畿内の有力前方後円墳への採用と期を一にしており、その顕著な地域として伊那谷南部と上毛野中・西部地域が指摘できる。畿内地域と両地域との構築技術上の相関が考えられる。

右島 和夫（みぎしま かずお）

群馬県立歴史博物館 特別館長

奈良県立橿原考古学研究所 特別指導研究員

## I. はじめに

筆者は以前、上毛野地域（現在の群馬県地域に近い）の初現期横穴式石室の基礎的整理を行なったことがある（右島 1983）。6世紀初頭を前後した時期に一定地域の前方後円墳に一斉に採用されること、それと併せてセカンダリー以下の被葬者が想定される帆立貝式古墳や有力円墳にも採用されること、石室は前方後円墳は両袖式、帆立貝式墳以下は袖無式に明確に区分されること、分布が当地域中・西部に偏在すること等を確認した。ただし、前方後円墳の多くは詳細な発掘調査が未実施だったこともあり、横穴式石室の系譜的検討、墳丘と石室の構造的連関に対する畿内地域との関係性の追究は十分ではなかった。表題に付した「初現期」は、一定地域で最初に登場した段階を示しており、当然地域間で登場時期に温度差がある。

東日本諸地域における横穴式石室の採用は、愛知県西尾市中之郷古墳や同岡崎市長ヶ峰1号墳のように5世紀中葉を前後した時期の北部九州系の系譜に繋がる数少ない事例（土生田 1988）を除けば、いずれもMT15式期以降に属する。そのような中、長野県飯田市周辺の伊那谷南部の地域と上毛野地域中・西部では、MT15式期に当該地域の最大級の前方後円墳をはじめとして地域総体に採用が及んでおり、特筆される（白石 1988、飯田市教育委員会 2007、土生田 2009）。この2地域に類する顕著な登場形態は今のところ他には見いだせない。単に新たな葬制としての横穴式石室が東日本諸地域に広く拡散していったとは言い切れないところであり、上記2地域の特別な歴史的背景を考える必要がある。

畿内における大王墓等の有力前方後円墳への横穴式石室の採用は、前述したように6世紀初頭を前後した時期の所産と考えられている。そこにはヤマト王権による横穴式石室の公式採用の動きがあったことが想定される。

5世紀後半の大阪府柏原市高井田山古墳（円墳、径22m）に始まる中小規模墳への採用には、新たな百済からの直接的影響下になされたことが明らかになってきている（安村ほか 1996）。その場合、この時期の百済中枢では高塚形式の墳丘志向が殆どないことを注意する必要がある。畿内地域で最初に採用された中小規模墳では、百済の地山面を掘り下げて石室を構築する地下式・

半地下式構造がそのまま移入されたと考えられる（吉井 2008）。

これに対して大王墓を初めとする最有力前方後円墳への採用の場合、高塚形式の大型墳墓への導入であったため、中小規模墳採用時期との間にタイムラグが存在したことが考えられる。そこに畿内型石室成立の画期点を見出す土生田純之氏の理解（土生田 1994）に筆者も賛成である。

大型前方後円墳への採用の中で筆者が特に注目しているのは墳丘築成と横穴式石室の構築基盤構造の関係である。有力前方後円墳への採用では、このことに意が注がれ、大型墳丘と横穴式石室との整合性がはかられていったことが推測される。白石太一郎氏は前方後円墳と横穴式石室の関係性について位置的關係を中心にしてすでに検討を及ぼしている（白石 2009）。

大王墓をはじめとする有力前方後円墳に横穴式石室が採用されるということは、当然墳丘に見合った大型横穴式石室の成立につながった。それに伴って石室の構築基盤も強固な構造が必要になってきた。前方後円墳そのものの構造、構築過程も大きく変化したことが推測される。この検討課題は墳丘の内面的な部分にあたり、表面上には顕著な変化として表れないためあまり注意にのぼってこなかったきらいがある。

本稿で中心的に取り上げる上毛野地域の初現期横穴式石室をめぐる考古資料的状況は前稿以降大きな変化があった。前二子古墳・築瀬二子塚古墳では、保存・整備のための念入りな発掘調査が実施された。前橋市王山古墳では、調査成果の検討が大きく深化した。また富岡市一ノ宮4号墳、安中市琴平山古墳が新たに加わった。また、前述したように同じ時期の帆立貝式古墳以下の中小古墳にも横穴式石室の初現期の事例も増えており、前方後円墳との構造的関係性の検討が可能になっている。

さらに6世紀第2四半期の築造が推定される藤岡市七興山古墳の主体部については従来不分明であったが、最近詳細な墳丘の3次元測量と地下レーダー探査が実施され、墳丘規模・構造、横穴式石室の存在や位置等についての具体的根拠が得られている（城倉ほか 2020）。

初現期横穴式石室と墳丘の関係性の視点から畿内地域と上毛野、伊那谷南部地域の諸例を見ていくと、時期的同時性に加えて、畿内とこれら2地域との間に墳丘構造

表1 上毛野地域の主要初現期横穴式石室（古墳番号は図1と共通）

No.	古墳名	時期	墳形	規模(m)	石室	所在地
1	築瀬二子塚	5世紀末～6世紀初頭	前方後円	80	両袖	安中市原市
2	後閑3号	6世紀初頭	円	20	袖無(T字)	安中市下後閑
3	下増田上田中1号	6世紀初頭	円	12	袖無(T字)	安中市松井田町下増田
4	下増田上田中2号	6世紀前半	円	19	袖無	安中市松井田町下増田
5	琴平山	6世紀前半	前方後円	48	不明	安中市松井田町小日向
6	一之宮4号	6世紀初頭	前方後円	48	両袖	富岡市一之宮・田島
7	桐淵11号	6世紀前半	円	16	袖無	富岡市下高瀬
8	若田大塚	6世紀初頭	円	30	袖無	高崎市若田町
9	少林山台12号	6世紀前半	円	24	袖無	高崎市鼻高町
10	御部入18号	6世紀前半	円	14	袖無	高崎市乗附町
11	本郷稲荷塚	6世紀初頭	帆立貝	34.5	袖無	高崎市本郷
12	王山	6世紀初頭	前方後円	75	両袖	前橋市総社町
13	龍海院裏	6世紀前半	円	30	袖無	前橋市紅雲町
14	旧上陽村24号	6世紀初頭	円	25	袖無(T字)	前橋市山王町
15	羽黒2号	6世紀初頭	円	20	袖無	伊勢崎市茂呂町
16	正円寺	6世紀前半	前方後円	70	両袖	前橋市堀之下町
17	前二子	6世紀初頭	前方後円	92	両袖	前橋市西大室町
18	荒砥245号	6世紀初頭	円	12	袖無	前橋市西大室町
19	洞山	6世紀前半	前方後円	22以上	両袖?	伊勢崎市赤堀町
20	洞山西北	6世紀初頭	円	不明	袖無	伊勢崎市赤堀町
21	権現山2号	6世紀前半	円	8.6	袖無(L字)	伊勢崎市豊城町
22	津久田甲子塚	6世紀前半	円	12.5	袖無	渋川市赤城町
23	伊熊	6世紀前半	円	8以上	袖無	渋川市子持町
24	有瀬1号	6世紀前半	円	7.4以上	袖無	渋川市子持町
25	四戸1号	6世紀初頭	円	10	袖無	東吾妻町三島
26	四戸2号	6世紀初頭	円	12	袖無	東吾妻町三島

上の親縁性が見えてくる場所である。

以下、墳丘構造と横穴式石室の関係性を中心に該当する主要古墳について具体的に見ていきたいと思う。なお本稿で初現期横穴式石室としているのは、主としてMT15～TK10式期に属するものである。

## II. 畿内地域の初現期横穴式石室前方後円墳の諸例

市尾墓山古墳（奈良県高取町）当該期に属する前方後円墳の中で、多岐に及ぶ詳細な発掘調査情報が得られている（河上ほか1984、木場2007）。墳丘長66m（高取町教育委員会の第2次調査以降で約76mとなった）の2段築成の前方後円墳である。墳丘主軸をほぼ東西とし、後円部で主軸と直交して南に開口する片袖式横穴式石室である。石室の奥壁中心を後円部中心にほぼ一致させる意図が見て取れる。

石室は墳丘第1段の上面に乗り、第2段に組み込まれ

ている。前方部コーナー部分での断面観察と石室床面下部構造の調査の結果、第1段は地山整形により造成し、その上に盛土構造の第2段が築成されている。石室構築部分については、この地山整形面上に石室平面規模を一回り上回る範囲に石敷地形が施され、その上に壁体構築がなされている。地山整形面でも安定的な構築面が得られるが、これまででない大型の石室構造であるためさらに念を入れた石敷の基礎構造としているのだろう。

石室内に安置されている刳拔式家形石棺の接地面が完成時の床面であるが、石敷地形面（構造上の基底面）から約40cmの高さである。完成した墳丘構造においては、墳丘第1段の平坦面（基壇面）から約50cm下り込む段構造で石室床面に達している。

石室構築基盤面である地山整形上面に対して約1mの盛土が施されて最終的な第1段上面が整備され、石室への入口部が造成されたものと推測される。

これとは別に、第2段くびれ部付近の断面観察によ

り、円丘部と方丘部が別々に造られ、その後に両者をつないで墳丘を完成させているとする指摘は、墳丘と石室の構築過程の具体的な工程を確認できる点で重要である。おそらく、地山整形により墳丘第1段が造成されると、その後まず石室構築と壁体補強の盛土構造が一体的になされ、さらにそれを覆う盛土により第2段円丘部が造られ、その後に方丘部が付け足される過程が想定できる。

畿内地域における有力横穴式前方後円墳の嚆矢に近いと考えられる当墳において、墳丘主軸を東西とし、東に後円部を配する2段築成で、第1段は地山整形、第2段は盛土構造とする横穴式石室前方後円墳の基本スタイルがすでに成立している点に注意される。

石上神宮・布留遺跡周辺の前方後円墳（奈良県天理市）当該地域一帯には、5世紀末葉から6世紀後半に築造された顕著な大型前方後円墳が数多く認められる。5世紀末葉の西乗鞍古墳（118m）に始まり6世紀前半の東乗鞍古墳（83m）、小墓古墳（80.5m）、6世紀中葉～後半の別所大塚古墳（125m）、ウワナリ塚古墳（128m）、石上大塚古墳（107m）である。このうち東乗鞍・ウワナリ塚・石上大塚古墳では横穴式石室が確認され、別所大塚古墳でも横穴式石室の痕跡を後円部に確認できる。当地域一帯でこの時期に連綿と充実した前方後円墳が造られ続けたことは、布留遺跡・石上神宮との強い関係性を踏まえると物部氏の族長墓である可能性が強いとされている（白石 2016）。

そのような背景の中で最初に造られた横穴式石室前方後円墳が東乗鞍古墳である。早くに石室が開口しており、その存在と概要はよく知られていたが、近年の天理大学及び天理市教育委員会の継続的な詳細調査により具体的な内容が明確になってきた（山内 2014、小田木編 2022）。

墳丘は東西方向の丘陵性地形を利用して築造された2段築成で、東に後円部を配している。近年の一連の基礎調査で墳丘長 83 m であることがわかった。後円部側では、墳丘第1段は地山削り出しによる造成を基本としており、第2段は盛土構造である。これに対して前方部前端側は 2 m 弱の盛土がなされて第1段の平坦面（基壇面）に達している。東から西に向けて若干下り傾斜の基盤面であると思われるが、後円部側については基本的には地山整形により第1段が造成されていると想定できる。後

円部第2段に主軸と直交して位置する横穴式石室は早くに開口しており、簡易な実測図が作成されている。地山整形された墳丘第1段上面を構築基盤としていることが推測される。刳抜式家形石棺の型式等から6世紀前半の比較的早い時期が想定されている（千賀 1997）。

東乗鞍古墳の西側に隣接する西乗鞍古墳は、墳丘主軸を南北とし、北に後円部を配する2段築成である。出土須恵器、埴輪の特徴からTK47式期の所産と考えられている。最近、ミュオンラジオグラフィによる遺構探査により後円部上段で横穴式石室の存在を想定させる反応が得られており（石黒・西藤・毛登・石田 2016）、今後の展開が期待される。いずれにしても、西・東乗鞍古墳は、継起的に築造された前方後円墳と考えられるので、西乗鞍古墳の主体部如何がポイントになってくる。

なお別所大塚・ウワナリ塚・石上大塚古墳も、第1段が地山整形、第2段が盛土構造で、第1段上面を石室構築基盤としていることが想定できる（泉 2001）。

今城塚古墳（大阪府高槻市）長期にわたる考古学的調査の結果、継体天皇の王墓として間違いないとされる今城塚古墳では、墳丘構造と横穴式石室の関係が明らかにされている（今城塚古代歴史館 2020）。

墳丘主軸をほぼ東西とし、東に後円部が配されている。墳丘長 181 m の3段築成（後円部3段、前方部2段）で、第1段の中途までが地山でそれより上が盛土構造となっている。築造時期については、出土した須恵器がMT15からTK10式期に属することから継体の崩御年に近い時期の所産であることがわかる。

横穴式石室の本体そのものは、伏見地震（1596）をはじめとする後世の損壊のため失われ、具体的内容を把握することはできないが、石室構築のための基盤構造（「石室基盤工」）が遺存していたために概要を推測することができる。基盤構造は後円部第2段の上面に施設されていたことから第3段内に位置していたことがわかる。基盤構造は一辺約 16 m、高さ約 60 cm の石敷で強固に構成されている。南に開口するこの時期の通有の石室よりさらに大型の石室が想定されよう。

なお、第2段上面に設置されたこの石積基盤構造の直接下部にくる第1、第2段の盛土構造については、他の箇所と異なる版築状に近い念入りな下部構造が施設されていたことが十分想定されるところである。通常の盛土

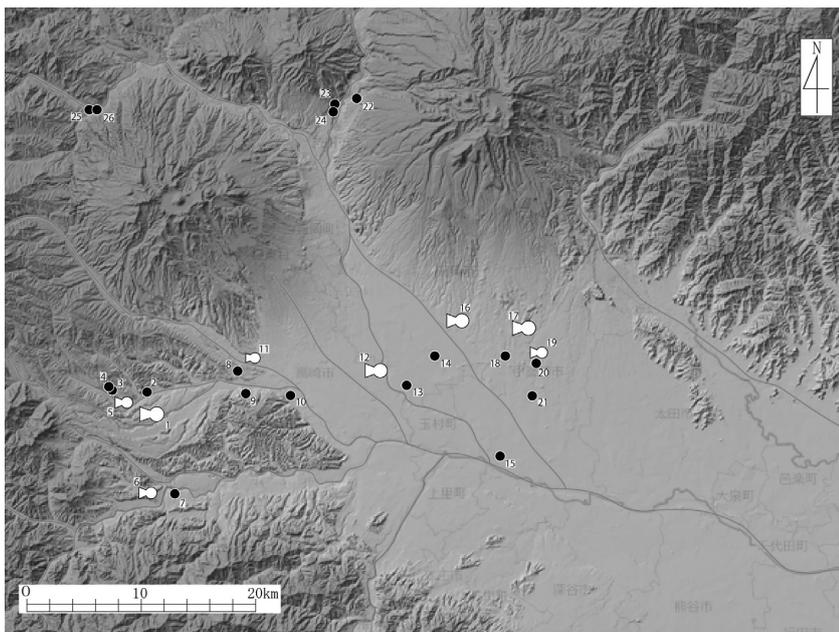


図1 上毛野地域地域初現期横穴式石室分布

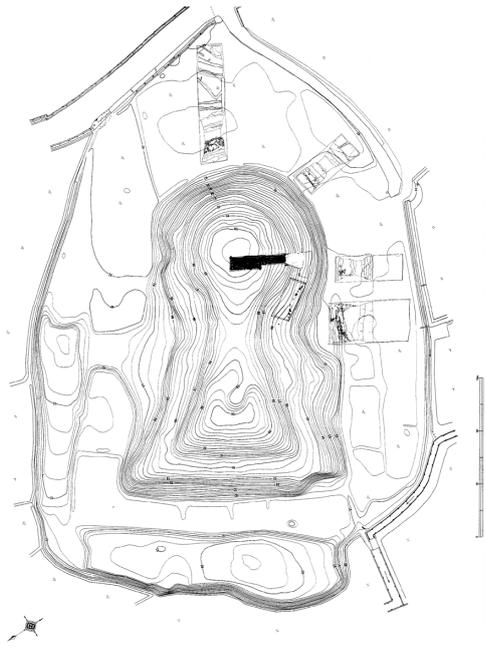


図2 市尾墓山古墳墳丘図

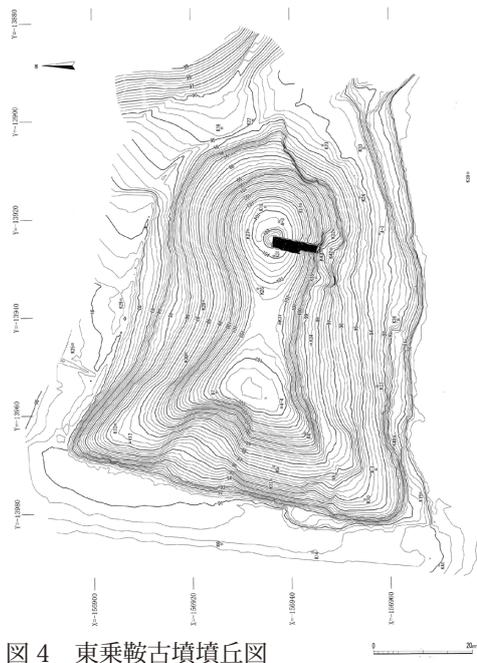


図4 東乗鞍古墳墳丘図

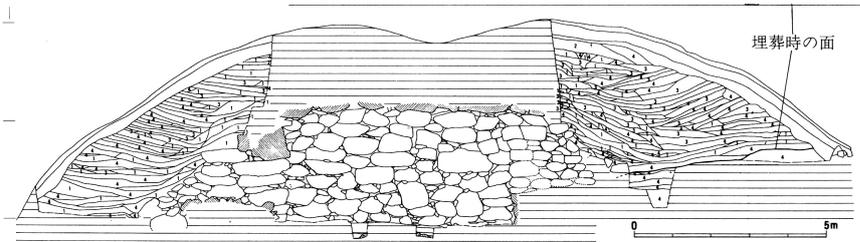


図3 市尾墓山古墳墳丘・横穴式石室断面図

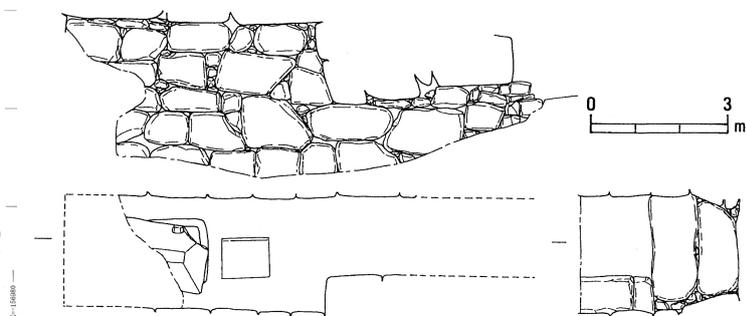


図5 同左 横穴式石室



図6 今城塚古墳墳丘(東上空より)

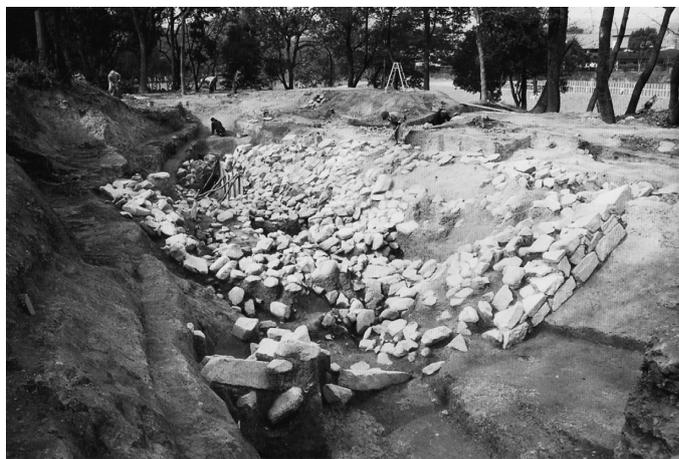


図7 同左 石室基盤構造

構造では到底もたないことが十分推測されるからである。ただし大半が盛土構造からなる第2段上面にこの基盤構造が造成されたとしても、本来的に大型石室を保持し切れたのか、石室崩壊の主要因が伏見地震のみに帰せられるのかどうかの再検討の必要があるのではないだろうか。

上毛野地域では、高崎市綿貫観音山古墳、伊勢崎市阿弥陀古墳等の6世紀後半の前方後円墳で盛土構造の墳丘第1段上面に位置する石室の下部構造部分を徹底して入念に造成しているのが確認されている(右島2010)。

**勝福寺古墳**(兵庫県川西市) 本墳では市尾墓山古墳に若干後出するMT15～TK10式期に最初の横穴式石室(第1石室)が築造された。墳丘主軸をおおよそ南北とし、後円部を北に配し、墳丘長約45mを有している。2段築成の第1段の大半は地山整形により造成されており、第2段は盛土構造となっている。

中心的な主体部である第1石室は、後円部に位置し、墳丘主軸とほぼ併行し、異例の北に開口する。片袖式石室で、基本的には地山削り出しにより造成された第1段上面を構築基盤としている。その際、奥壁背後の状況からすると石室の構築範囲について地山面を奥壁背後で約1m掘り下げている(大阪大学勝福寺発掘調査団2007)。

**小結** 畿内における初現期の横穴式石室前方後円墳では、墳丘主軸を東西とし、後円部を東に配する2段築成で、第1段を地山削り出し、第2段を盛土構造とする。また横穴式石室は、第1段上面を構築基盤とし、後円部に位置して、墳丘主軸と直交して南開口する片袖式を基本スタイルとして成立したものと考えることができる。その典型例を市尾墓山古墳、東乗鞍古墳、物集女車塚古墳等に求めることができる。この基本スタイルは、初現期としたものに続く6世紀後半の事例において一段と定式化して継続していつている。

ただし、石室開口方向や墳丘主軸方向には、それ以外の方式を採るケースも散見し、注意する必要がある。個々墳に即しての占地条件、成立背景等を考慮していく必要がある。その場合も2段築成で第1段を地山削り出しとし、この面を石室構築面としている事例が大勢である。

そのような中、今城塚古墳は大半が盛土構造の3段築成で、第2段上面を石室構築基盤としている。確認された強固な石敷基盤構造に加え、さらに様々な側面に構造

工夫がなされていると推測される。

なお、6世紀後半に成立した列島最大規模の横穴式石室を有する墳丘長310m、3段築成の橿原市五条野丸山古墳の場合、第1段上面を石室構築面としている可能性が強い(福尾・徳田1994)。自然地形を最大限に利用した墳丘築成のため墳丘主軸が東西からややぶれるが、石室は南開口にこだわる。破格の巨石巨室構造であったことが、今城塚のように盛土構造の第2段上面を選択せず、あえて地山面の直接利用につながったものと考えられる。

### Ⅲ．上毛野地域の初現期横穴式石室前方後円墳の諸例

6世紀初頭を前後した時期、当地域の前方後円墳に横穴式石室が採用される。安中市築瀬二子塚古墳、前橋市王山古墳、同正円寺古墳、同前二子古墳が代表的である。これらはいずれもMT15式期の早い段階に属しており、その成立は一斉に近いものであった。

**築瀬二子塚古墳**(群馬県安中市) 場所は上毛野地域の西方、信濃地域から碓氷峠を越えて関東へと進む中山道(古代の東山道駅路に近い)の南側で、東流する碓氷川左岸に位置する。周辺一帯には本墳より古い有力古墳が全く認められないので、本墳の登場は新たな地域展開に呼応した動きと推測される。

墳丘は東西主軸で、東に後円部を配する2段築成で、全長約80mである。第1段は周壕底面から上面まで約2.7mの高さで、そのうちの約1.7mまでは地山整形により造成し、それより上位約1mが盛土構造である。第1段、第2段とも斜面部には全体に葺石が施されている。

明治12年(1879)に地元民による発掘調査的な行為により開口され、充実した副葬品が記録、保管されてきた。石室は両袖式で後円部に位置し、墳丘主軸と直交して南に開口する。壁面は川原石による多石構成で、全体に赤色塗彩が施されている。詳細調査の結果、第1段中途の旧地表面を構築基盤とし、第1段上面(基壇面)に開口させている。そのため、羨道入口から2段に下り込んで玄室部に達することになる。基壇面上に開口させるための工夫である。

ところで、墳丘第2段のくびれ部付近の葺石構造を見ると、両側とも後円部の葺石面が前方部葺石面との接

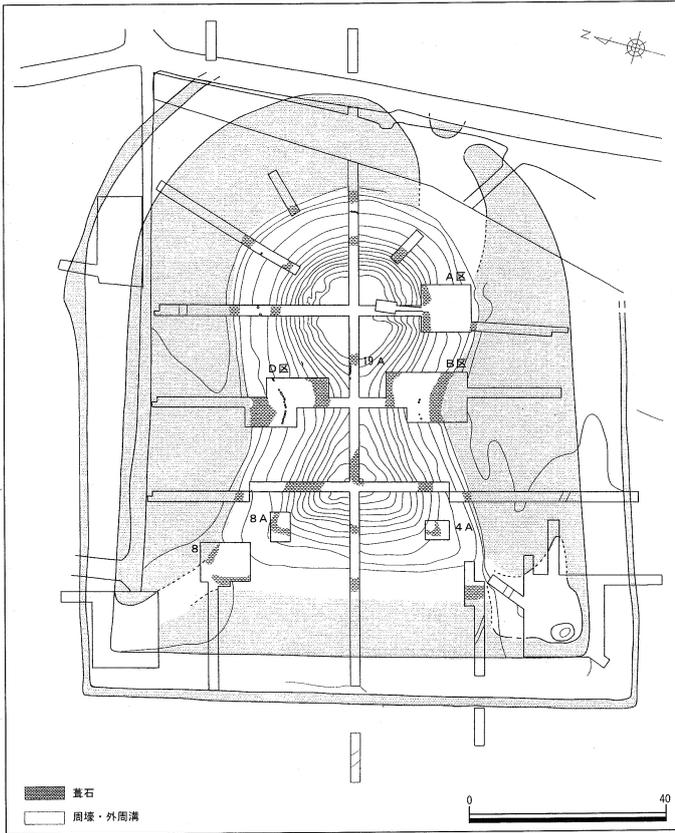


図8 築瀬二子塚古墳墳丘

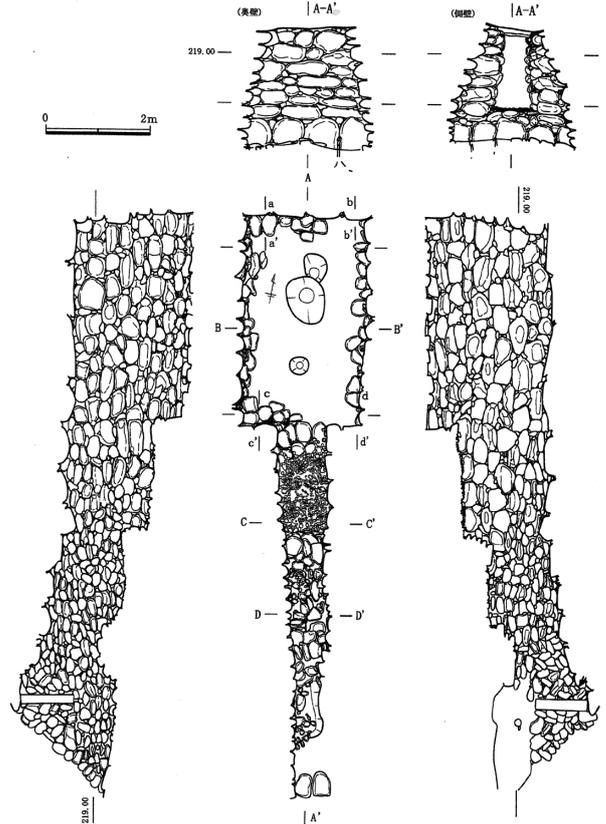


図9 同左 横穴式石室

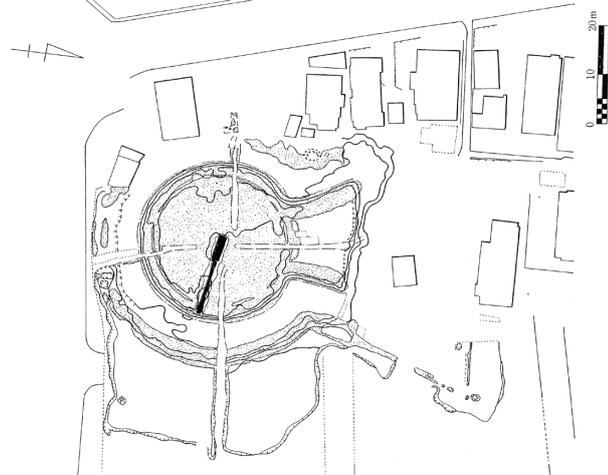


図10 玉山古墳墳丘



図11 同左 墳丘を東から望む

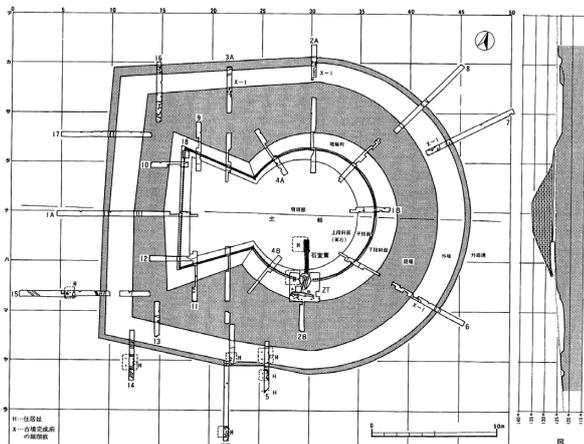
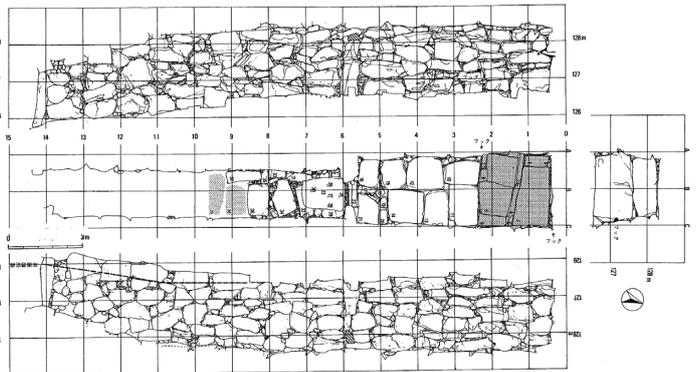


図12 前二子古墳墳丘



合部の内側まで続いているのが確認された。横穴式石室の構築と一体的に後円部が造られ、その後に前方部が取り付けられる過程を物語っている。この構造的特徴は王山古墳でも、より明瞭に確認されている（右島2001・2017）。

**築瀬二子塚周辺の初現期横穴式石室墳** 二子塚古墳から最大でも5km圏内の至近には、ほぼ同時期の次位以下に位置づけられる横穴式石室墳が数多く存在する。琴平山古墳（前方後円墳）、小日向壺丁田Ⅱ-1号墳（円墳）、下増田上田中1・2号墳（共に円墳）、瀧1号墳（円墳）、後閑3号墳（円墳）等である（千田1994、壁ほか2010、菅原・壁2012）。今後、周辺一帯で同様の事例がさらに増すことは十分考えられる。

琴平山古墳は主軸を東西とする墳丘長約50mの前方後円墳で、後世の削平のため墳丘の基底部付近を僅かに残すのみであった。地山整形の第1段にも葺石が施され、削平前の後円部の横穴式石室が知られており、金銅製三輪玉、馬具類等が出土している。調査では、周壕内から多量の埴輪が出土しており、石見型盾が目される。

後閑3号墳（径約21m）、小日向壺丁田Ⅱ-1号墳（同23m）、瀧1号墳（同15m）は2段築成で両段とも葺石があり、埴輪列が確認されている。第1段は地山整形で石室構築基盤面としており、第2段は盛土構造である。後閑3号墳の石室は、袖無式の変形のT字形式で、壺丁田Ⅱ-1号墳は袖無式である。

下増田上田中1・2号墳も2段築成で地山整形の第1段を石室構築基盤面とする。盛土構造の第2段のみに葺石が伴う。径約20mでT字形石室の1号墳には埴輪が伴い、径約15mで袖無式の2号墳には伴わない。

これらの横穴式石室墳は、築瀬二子塚古墳と細部の構造的特徴も共通にしており、築瀬二子塚古墳を中核に据えた共通の築造体制の下に成立したと考えられる。

**王山古墳**（群馬県前橋市）前方後円墳終焉後の終末期に上毛野地域を統括する地位に就いた総社古墳群に属している。その形成の端緒を開いた遠見山古墳（前方後円墳、87.5m、5世紀第4四半期）に続く6世紀初頭の墳丘で横穴式石室を実現した。

墳丘主軸を南北とし、南に後円部を配する墳丘長75.6mの2段築成で、後円部第2段に墳丘主軸と直交して東開口する両袖式石室を備える。後円部中心に奥壁が

位置するため、石室全長16.37mの狭長なものとなっている。羨道・玄室の両側壁とも利根川で採取される川原石による多石構成で、奥壁は幅いっぱいの川原石が2段まで残る。壁面には赤色塗彩がかるうじて確認できる。

本墳は、当初記録保存が前提であったため、墳丘の随所で断ち割り調査を実施した。その結果、墳丘構造の細部を確認できた。すなわち、築造開始当初は2段築成で周壕を有する大型円墳として完成させ、一定の時間をおいて前方部を付け足して前方後円墳とした工程が確認できた。そのため、円墳段階の周壕は最終的な前方後円墳の墳丘下に埋没していた。円墳段階の第1段は、地山整形の基盤の上に1mの盛土をし、葺石はない。第2段はすべて石のみで構成され、表面には丹念な葺石が施されていた。前方後円墳段階では、第1段平坦面は拡張されている。付け足された前方部は両段とも盛土構造で葺石が施されている。前方後円墳完成時には、前方部との接合部内に円墳段階の第2段の葺石面が隠れてしまうことになる。

石室は、円墳段階の第2段中途に床面が位置する状態で築造されている。第1段上面を構築面として石敷地形がなされ石室本体が構築されたものと推測される。

円墳から前方後円墳への推移の過程には、いかなる時間的経過が想定できるのだろうか。筆者は、両者の間にある程度の時間的経過は存在したものの、築造当初から前方後円墳を目的としての構築過程であったと考えている。

なお、後円部墳頂に配置されていたと推測される大型の大刀形・盾形埴輪が第1段上面（基壇面）から転落した状態で多量に出土している点は重要である。

**正円寺古墳**（群馬県前橋市）赤城山南麓沿いを南東流する桃ノ木川左岸にある。墳丘主軸を東西とし、東に後円部を配する2段築成で、墳丘長約70mを有している。後円部に主軸と直交して南開口する両袖式石室がある。川原石使用の多石構成で、築瀬二子塚古墳に近い特徴を有している。

墳丘は第1段が地山整形、第2段が盛土構造を基本としていることが推測され、第2段には葺石が伴う。石室は第1段上面を構築基盤とし、南に開口している。

**前二子古墳**（群馬県前橋市）前橋市の東方、赤城山南麓に所在する。6世紀初頭から後半にかけての大型の前



図14 七輿山古墳を東上空から望む



図15 七輿山古墳地下レーダー探査  
後円部第2段部分に墳丘ラインと直交する  
羨道想定部分が見える

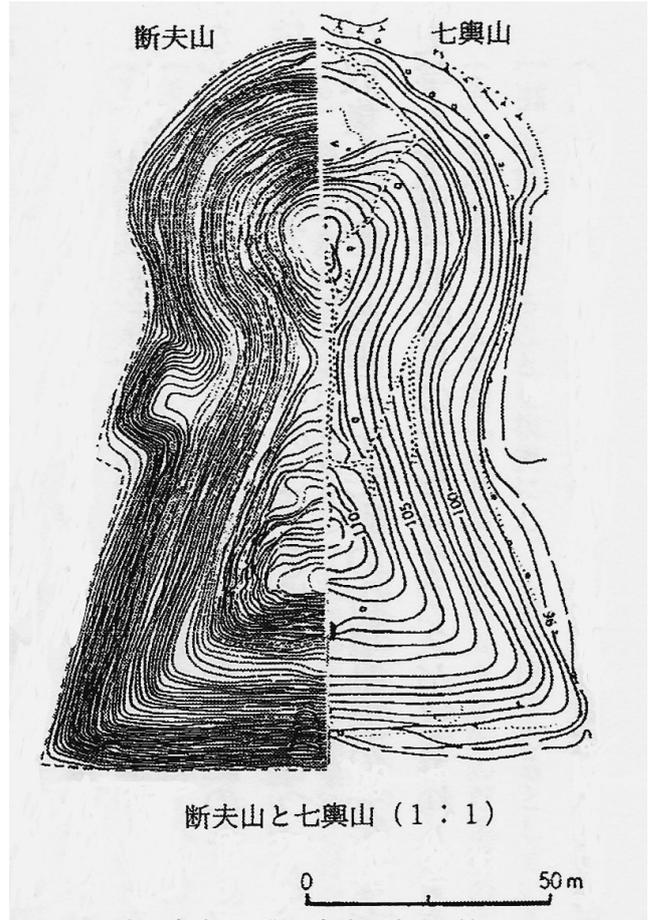


図16 断夫山古墳と七輿山古墳の墳丘比較



図17 築瀬二子塚古墳振り環頭



図18 後閑3号墳銅製三輪玉



図19 王山古墳大刀形埴輪

方後円墳3基（前二子・中二子・後二子古墳）から構成される大室古墳群の最初に位置する。長期にわたる基礎的調査、石室修復の結果、墳丘と横穴式石室の構造的特徴が具体的に把握できた。

墳丘は東西走向で南西に緩やかに下がる舌状台地を巧みに利用して形成されている。主軸を東西に取り、東側に後円部を配する墳丘長93.7mの2段築成で、後円部に墳丘主軸と直交して南開口する両袖式石室を有している。第1段は中途までが地山整形で上部寄りが盛土構造である。第2段は盛土構造でこちらのみに葺石が施される点は正円寺古墳と同じである。

石室は両袖式で、第1段の中途に位置する旧地表面を構築基盤としている。石室の奥側から入口側にかけて床面が50cm以上下がっている。これは地山面の傾斜に合わせて石室を構築した結果である。玄室入口部及び羨道入口部に板状石材による閉塞石がある。また、玄室から羨道中途までの床面下には凝灰岩の加工石材を敷き詰めた舗石構造が認められる。なお、玄室から羨道までの壁面には赤色塗彩が施されている。

明治11年（1878）の地元民の調査的行為で、副葬品の出土位置記録と豊富な現物の保存がなされ、振り環頭大刀、各種馬具類、土師器・須恵器類等が出土している。七輿山古墳（群馬県藤岡市）保存整備に伴う基礎調査により、6世紀第2四半期に属し、この時期としては列島屈指の墳丘規模が確認され（志村1990・1991・1992）、さらに同時期の名古屋市断夫山古墳との同規模・規格、今城塚古墳との相似形が指摘され（若狭2007・2017）、大いに注目されて来ている。ただし発掘調査範囲は中堤を含めた外側部分に限られていたため、横穴式石室の可能性は指摘されつつも具体的情報は得られなかった。最近本墳の3次元測量、地下レーダー探査等が実施され、墳丘の詳細情報と横穴式石室の所在箇所もほぼ確定することができた（城倉ほか2020）。

墳丘は、主軸を東西とし、後円部を東に配する3段築成で、墳丘長約150mを有している。墳丘を周辺一帯の微地形の中で見てみると、これを巧みに利用して巨大な墳丘を実現している。古墳の位置は付近を東流する鐮川の右岸に当たる。河岸段丘面が3段に形成され、その中位面に位置している。古墳の南側は上位面と接している。この上位面から中位面にかけてを大規模に造成して古墳

築成を行っている。墳丘第1段は地山整形により造成し、第2、3段は盛土構造と推測される。

レーダー探査で明瞭に確認された石室位置は、墳丘主軸と直交して後円部第2段に造り込まれ、第1段上面に南開口する。反応したのは羨道部分で、詳細は将来に待ちたい。巨大な石室である可能性は十分あり、地山整形により築成された墳丘第1段が構築基盤となっていることは間違いない。

小結 初現期に属する前方後円墳を見てみると、いくつかの共通した特徴が見いだせる。古墳の時期が6世紀初頭を前後した時期に一斉に近く登場する。地山整形により築成された墳丘第1段を石室構築基盤とし、第2段に造り付けられる。墳丘主軸を東西とし、後円部から南開口する。石室はすべて両袖式であり、壁面は川原石による多石構成で、壁面赤色塗彩されている。なお、羨道から玄室にかけての天井面が連続しており、段をなさない点も特徴的である。

当該前方後円墳の周辺一帯には同時期の中小石室墳が存在し、構築技術的には前方後円墳と関連しつつも、袖無式を採用する点で厳密に区分されている。これらも前方後円墳と同じく地山面を石室構築基盤としている。

#### IV. おわりに

以上、主として畿内地域と上毛野地域で6世紀初頭を前後した時期に新たに登場する主要横穴式石室前方後円墳について、墳丘と石室の関係を中心に検討してきた。今回は石室そのものの両地域間における比較検討には具体的に及ぼしておらず、近い将来に期している。従来の理解では、両地域の石室構造には直接的関係性が見出したいとしてきたが、登場の契機には、畿内地域の動向との強い関係性を想定せざるを得ない。このことを踏まえた上で、石室構造上の親縁性が認められない背景を検討する必要がある。

上毛野地域同様に顕著な登場動向を示す伊那谷南部の場合にも、前方後円墳の墳丘と石室の構造的関係性は、畿内・上毛野と同様の特徴が見いだせるが、石室の構造的特徴は上毛野同様直接的関係性は見出せない（飯田市教育委員会2007）。いわゆる畿内型石室の畿外地域への拡散については再考の必要性を痛感している。

畿内と上毛野地域の関係性の深化 5世紀後半に畿内と

上毛野の地域間関係が一段と緊密化する。他地域に先駆けてこの時期に馬匹生産が本格化することは、同じ動きを示す伊那谷南部の動向を踏まえると、畿内と東国を結ぶ東山道駅路の前身に当たる内陸ルートが成立し、緊密化を促進させたことを推測させる。上毛野地域の保渡田古墳群の成立の端緒となった井出二子山古墳、北武蔵地域の埼玉古墳群形成の端緒を開いた埼玉稲荷山古墳、下毛野地域圏成立の端緒となった摩利支天塚古墳のそれぞれが、新たな地点にほぼ期を一にして登場するのも同じ文脈の中でとらえられるところである(右島 2008・2019)。上毛野地域で馬匹生産の活発化に歩調を合わせるかのように埴輪生産、須恵器生産、鉄器生産等の最先端の生業が展開していくのもその証と解することができる(真鍋 2019、藤野 2019)。

**榛名山の大規模噴火と初現期横穴式石室** 上毛野地域で横穴式石室が登場する直前の時期、榛名山が大噴火(榛名渋川テフラ：Hr-FA)を起こし、大規模な災害が発生した。被害が最も大きかったのは榛名山東南麓～東麓～北東麓である。東南麓の一带は保渡田古墳群(古い方から順に井出二子山→保渡田八幡塚→保渡田薬師塚古墳。いずれも墳丘長 100m 前後。舟形石棺を埋葬施設とする。三ッ寺 I 遺跡の豪族居館も帰属)の直接基盤である。5 世紀後半を中心とした時期、当古墳群の勢力が上毛野地域を主導する存在であったことが十分想定される。この勢力に関わる地域一帯は噴火後に発生した大規模火山性泥流の襲来により全農耕地が壊滅的に近い被害を受けるところとなった。

ちなみに最も被害が大きかったのは現在の渋川市域が該当する東麓から東南麓にかけてで、噴火に伴う大規模火砕流によって大打撃を受け、その後の火山性泥流が追い打ちをかけるところとなった。

ところで、保渡田古墳群の周辺一帯には、噴火後の時期に属する顕著な古墳は全く認められない。すなわち、初現期横穴式石室は、榛名山東南麓以外の上毛野中・西部地域に登場してくるわけである。

上毛野地域に対してより影響力の強い関係性を目論むヤマト王権にとって、地域を大きくゆるがす榛名山大噴火の生起は、新たな展開の直接的契機になった可能性がある。

その意味では 6 世紀第 2 四半期の七興山古墳の成立は

より注意されてしかるべきである。実際の年代比定等については議論の余地を残しているが、安閑 2 年(535)の緑野屯倉設置記事が時的にも地域的にも通底してくる側面を有しているからである。列島規模で見た場合にも、断夫山古墳とともに今城塚古墳に次ぐ第 2 位の墳丘規模であることは、大型横穴式石室、王陵系埴輪の存在とも併せ、王権の直轄地設定の動きに呼応するものと思えてならない。

その場合、ほぼ同時期の成立が推定されている埼玉古墳群中最大規模の二子山古墳(墳丘長 132m)の最近の 3 次元測量・地下レーダー探査により、横穴式石室の存在が想定されている(城倉ほか 2018、埼玉県立さきたま史跡の博物館 2023)ことは、墳丘規模の大型化の問題ともあわせ成立背景を追究する必要がある。その場合、レーダー探査で想定された位置が、盛土構造上の第 2 段上面を石室構築基盤としていることになるので、今後の具体的検討を待ちたい。

**初現期横穴式石室墳と副葬品・埴輪** 5 世紀第 4 四半期に成立し、6 世紀前半以降に盛期となる振り環頭大刀は、継体朝と密接に結びついた副葬品として位置づけられており(高松 2006、深谷 2008)、畿内地域とその周辺及び東海・北陸地域の分布に注意が向けられている。上毛野地域が極めて顕著な分布傾向を示している点も注意する必要がある。副葬品の遺存状態が良好な築瀬二子塚古墳、前二子古墳からの出土は注目される。当地域では 8 例が知られている。一方、同大刀の勾金を飾る三輪玉は、この大刀と一体的なものとして理解できるが、その事例は 16 例を数え、既出の琴平山古墳、後閑 3 号墳も入ってくる(徳江 2005、右島 2022)。当該大刀の多さは、初現期横穴式石室の多さと同じ背景の中での位置づけが可能である。

一方、上毛野地域のこの時期の埴輪の趨勢を見ていくと、振り環頭大刀をモデルとした大刀形埴輪が器財埴輪の中で盾・靴・鞆形埴輪等とともに確固たる位置を占め、墳頂面で主体部の位置を取り巻くように圍繞される配置形態が普遍化していく(右島 1993)。その先駆的事例を王山古墳に認めることができる。ヤマト王権が振り環頭大刀を新たな威信財として位置づけていく流れに応じて振り環頭大刀をモデルとした大刀形埴輪が極めて盛んに樹立されたところである。

石見型埴輪が前二子古墳・琴平山古墳・一ノ宮4号墳から出土している点も注目される点である。有力古墳の埴輪組成の全体像の把握は困難を伴うが、当地域の場合、石見型埴輪の類例が増すことは十分ある。

このように、畿内地域の古墳を構成する新たな動向に呼応するように上毛野地域の初現期横穴式石室に伴う新たな動向は単なる主体部形式の転換のみの問題にとどまらないことをよく示しているところである。

**初現期横穴式石室と物部氏** 上毛野地域における初現期横穴式石室の分布域は、物部氏関係の資史料・地名の濃密な分布域（石川 1988、関口ほか 1991、川原 2005）と重なる。築瀬二子塚古墳の所在地は古代上野国碓氷郡であり、『続紀』天平勝宝元年（749）には、碓氷郡人石上部君諸人の昇叙記事が出てくる。また、一ノ宮4号墳の目と鼻の先は、上野一ノ宮貫前神社（祭神経津主神）の所在地であり、両者のちょうど間の地点から6世紀前半の大規模豪族居館本宿郷土遺跡が見ついている。この他、上毛野地域西部地域における物部・石上関連の資史料は枚挙に遑がない。

当地域の初現期横穴式石室の登場については、この物部・石上色の濃い西部地域を中心に所在しているところである。初現期横穴式石室の登場に、ヤマト王権との関係性の深化の動きを見て取ることができたところであるが、とりわけ物部氏との関係性の観点からも見ていく必要があると思われる。その意味では、布留遺跡・石上神宮周辺地域一帯における初現期横穴式石室前方後円墳の盛んな造墓活動は示唆的な動向として注意していく必要がある。

本稿を草するに際して、下記に掲げる方をはじめ多くの方々から指導・助言・支援を受けることができた。記して感謝申し上げる次第である。

青柳泰介、入江文敏、小川卓也、呉心怡、城倉正祥、徳江秀夫、鳥居貴庸、土生田純之、東影悠、深澤敦仁、山内紀嗣、吉村和昭（敬称略、アイウエオ順）

#### 引用・参考文献

飯田市教育委員会 2007『飯田における古墳の出現と展開』  
石川正之助 1988「物部君、磯部君、石上部君」『群馬県立歴史博物館研究紀要』9号 群馬県立歴史博物館

石黒勝己・西藤清秀・毛登優貴・石田大輔 2016「ミュージオ  
ンジオグラフィーによる西乗鞍古墳埋葬施設の研究」『日本文化財科学会第33回大会発表要旨集』日本文化財科学会第33回大会事務局

泉武 2001「別所大塚古墳」「石上大塚古墳」「ウナリ塚古墳」  
『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所

今城塚古代歴史館 2012『よみがえる古代の煌き』

今城塚古代歴史館 2020『群集墳と横穴式石室』

内田真雄 2022「今城塚古墳と埴輪群像」『別冊季刊考古学  
淀川流域の古墳時代』雄山閣

大阪大学勝福寺発掘調査団 2007『勝福寺古墳の研究』

小田木治太郎編 2022『杣之内古墳群の研究Ⅱ』天理大学

壁伸明ほか 2010『小日向地区遺跡群』安中市教育委員会

河上邦彦ほか 1984『市尾墓山古墳』高取町教育委員会・奈良  
県立橿原考古学研究所

川原秀夫 2005「上毛野における氏族の分布とその動向」『装  
飾付大刀と後期古墳—出雲・上野・東海地域の比較研究—』

島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター

木場幸弘 2007『国指定史跡市尾墓山古墳整備報告書』高取  
町教育委員会

埼玉県立さきたま史跡の博物館 2023『特別史跡埼玉古墳群  
二子山古墳発掘調査報告書』

志村哲 1990・1991・1992『七輿山古墳範囲確認調査報告書』  
V・VI・VII 藤岡市教育委員会

城倉正祥ほか 2018「埼玉二子山古墳のGPR調査2017」『溯航』  
36 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

城倉正祥ほか 2020『七輿山古墳の測量・GPR調査』早稲田  
大学都城・シルクロード考古学研究所

白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室」『信濃』40巻7・8  
号 信濃史学会（後に白石『古墳と古墳時代の文化』塙書  
房 2009所収）

白石太一郎 2009「古墳の墳丘における横穴式石室の位置」『書  
陵部紀要』61 宮内庁書陵部

白石太一郎 2016「古墳からみた物部氏」『近つ飛鳥博物館  
館報20』近つ飛鳥博物館

菅原龍彦・壁伸明 2012『下増田上田中遺跡』安中市教育委  
員会

関口功一ほか 1991「物部と石上」『矢田遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵  
文化財調査事業団

千田茂雄 1994『九十九川沿岸遺跡群3』安中市教育委員会

高松雅文 2006 「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」  
『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会

伊達宗泰 1976 「周辺地区の調査 石上大塚・ウワナリ塚・  
別所大塚」『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』奈良県立橿原考  
古学研究所

千賀久 1997 「畿内の横穴式石室成立期の様相」『古文化論叢  
—伊達先生古希記念論集—』伊達先生古希記念論集刊行会

徳江秀夫 2005 「上野地域の装飾大刀と後期古墳」『装飾大刀  
と後期古墳 —出雲・上野・東海地域の比較研究—』島根  
県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター

土生田純之 1994 「畿内型石室の成立と伝播」『古代王権と交  
流5 ヤマト王権と交流の諸相』名著出版(後に土生田『黄  
泉国の成立』学生社 1998 所収)

土生田純之 1988 「中ノ郷古墳横穴式石室実測調査報告」『西  
三河の横穴式石室 資料編』愛知大学日本史専攻会考古学  
部会(後に土生田『日本横穴式石室の系譜』学生社 1991  
所収)

土生田純之 2009 「東日本からみた伊那谷の古墳」『飯田市歴  
史研究所年報』7 飯田市歴史研究所

深谷淳 2008 「金銀装倭系大刀の変遷」『日本考古学』26 日  
本考古学協会

福尾正彦・徳田誠志 1994 「畝傍陵墓参考地石室内現況調査」  
『書陵部紀要』45 号 宮内庁書陵部

藤野一之 2019 『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房

前橋市教育委員会 1993 『前二子古墳』

前橋市教育委員会 2005 『大室古墳群 史跡前二子古墳・中二  
子古墳・後二子古墳ならびに小古墳 保存事業整備報告書』

松島榮治・中村富夫・右島和夫 1991 「群馬県前橋市王山古  
墳の調査」『日本考古学協会 57 回総会研究発表要旨』日  
本考古学協会

松本浩一 1981 「正円寺古墳」『群馬県史』資料編3 群馬県

真鍋成史 2019 「鍛冶を担う人々」『馬の考古学』雄山閣

右島和夫 1983 「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談  
叢』10 集 九州古文化研究会(後に右島『東国古墳時代  
の研究』学生社 1994 所収)

右島和夫 1993 「横穴式石室の地域間動向 —大和-東国—」  
『季刊考古学 45 横穴式石室の世界』雄山閣

右島和夫 2001 「築瀬二子塚古墳」『安中市史』第4巻 原始  
古代中世資料編 安中市

右島和夫 2008 「古墳時代における畿内と東国」『研究紀要』

### 13 由良大和古代文化研究協会

右島和夫 2010 「保渡田古墳群と六世紀初頭の榛名山噴火」『近  
藤義雄先生卒寿記念論集』

右島和夫 2011 「観音山古墳とその周辺」『勝部明生先生喜寿  
記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会

右島和夫 2017 「築瀬二子塚古墳の築造原理とその系譜」『築  
瀬二子塚古墳の世界』安中市学習の森ふるさと学習館

右島和夫 2019 「古墳時代における古東山道の成立と馬」『馬  
の考古学』雄山閣

右島和夫 2022 「古墳時代における儀仗刀の成立」『戦国上州  
の刀剣と甲冑』群馬県立歴史博物館

森田克行 2006 『今城塚と三島古墳群』同成社

安村俊史ほか 1996 『高井田山古墳』柏原市教育委員会

山内紀嗣 2001 「小墓古墳」「西乗鞍古墳」「東乗鞍古墳」『大  
和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所

山内紀嗣 2014 「西乗鞍古墳と東乗鞍古墳」『杣之内古墳群の  
研究』杣之内古墳群研究会

吉井秀夫 2008 「墓制からみた百済と倭」『百済と倭国』辻秀  
人編 高志書院

若狭徹 2007 『古墳時代の水利社会研究』学生社

若狭徹 2017 『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館

### 図版典拠

図2・3：河上邦彦ほか 1984 文献より

図4：小田木治太郎編 2022 文献より

図5：伊達宗泰 1976 文献より

図6：高槻市教育委員会『史跡・今城塚古墳 平成9年度規模確認  
調査』より

図7：今城塚古代歴史館 2020 『群集墳と横穴式石室』より

図8・9：安中市学習の森ふるさと学習館 2017 『築瀬二子塚古墳  
の世界』より

図10・11・19：前橋市教育委員会提供

図12・13：前橋市教育委員会 1993 文献より

図14・15：城倉正祥ほか 2020 文献より

図16：若狭徹 1995 文献より

図17・18：安中市教育委員会提供